



もっとメイドになります！

青橋由高

illustration ©ポチ加藤

美少女文庫
FRANCE & ANSHOIN

約束の力チューンヤ

少年の朝は、パソコンの電源を立ちあげてメイドさんからのメールをチェックすることからはじまる。

今は遠い異国にいる自らのメイドから毎日届くメールを読むのが、少年の日課であり、楽しみでもあった。

「由佳里さん、相変わらず文章長すぎ」

苦笑しながら、メールにしては長文のそれを目で追う。

書かれていることはいつも同じだ。

今日、あったこと。出会った人。食べたもの。感じたこと。

そして日記のような文章の端々に、主である少年に対する想いがちりばめられている。

元気でいますか。ちゃんとご飯を食べていますか。夜更かししていませんか。なにか困ったことはありませんか。

少年はメールを読み終えると、早速返事を書きはじめる。

自分は元気でいること。他のメイドたちも元気でいる（元気すぎる）こと。身のまわりで起きたこと。

最後に、帰ってくる日を心待ちにしていることを書き添えてから、送信する。

階下から、幼なじみが玄関を開ける音が聞こえてきた。今日もわざわざ登校する前に少年のために朝食を作りに来てくれたらしい。

パソコンの電源を落とし、制服に着替える。授業に使う教科書をもう一度確認していると、幼なじみが自分を呼ぶ声がする。

「勝、^{まひる}ごはんできたわよー」

「うん、今行くよ。……それじゃ行ってきます、由佳里さん」

少年がドアを閉めた風圧で、机の上に置かれた純白のカチューシャがひらりと揺れる。まるで主を送りだすかのように。

季節は冬を終え、春を迎えようとしていた。

第1話

由佳里

帰ってきました、ご主人様♥

1 思いがけない来訪者

「帰国する」

そんな国際電話が小坂勝（こさか かつ）の自宅にかかってきたのは、終業式をちょうど終えた三月下旬のことだった。

「え、帰国って、いきなり!? ちょ、ちょっと待って、それっていつなのさ!?……あ、明日え!」

裏返った声をあげる勝の顔に戸惑いが浮かぶ。

「なんでまた、そんな急に……どうかしたの?」

受話器の向こうからの返事を聞いた勝の表情が曇くもる。

「……うん、わかった、とりあえずそこらへんは、帰国してから話そうよ。飛行機の

時間、わかったら連絡して」

電話を切り、リビングのソファにどざりと腰をおろす。今の話について考えようと目を閉じた瞬間、隣のキッチンから耳慣れた声が聞こえてきた。

「誰からだったの？」

白のシャツにジーンズというラフな服装をした長身の少女がエプロンを身に着けながら勝に尋ねる。

「うわっ、いたの!？」

「アンタが電話してたから、気を遣って静かに邪魔したのよ」

隣に住む香山美沙^{かやまみさ}は勝と同年の幼なじみで、最近は以前にも増して小坂家の台所で料理の腕を振るう機会が増えていた。

「家で下ごしらえしてきたからそんなに時間かからないけど、できるまでにお風呂だけ準備しておいて」

「わかった。……今日のおかず、なに？」

「牛すじの煮込み」

「お、それは楽しみだ。じゃ、張りきって風呂洗おっと」
勢いをつけてソファから立ちあがり、浴室へと向かう。

「手抜きしないでちゃんとスポンジでしっかり洗うのよ!？」
横着して、シャワーでざ

つと流すだけなんてダメだからね!」

「わかってるって」

昨年の春、父親の海外勤務に母親がついていったことに端を発した勝の一人暮らしも、そろそろ丸一年になろうとしている。もともと、本当の意味での一人暮らしをはじめたのは昨年の秋からなので、実質まだ半年くらいしか経っていない。それまでは住みこみの家政婦——本人にそう言うのと怒られるが——が一緒だったのだ。

息子に一人暮らしは無理だと考えていたのだろう、母親がツテを頼って家政婦を雇ったのが、勝の人生を大きく変えてしまった。

小坂家の玄関に現われたその人は「家政婦」という単語から連想されるような年配の女性ではなく、勝や美沙とほとんど年齢の変わらないうら若き美女だった。しかも純白のカチューシャと紺色のエプロンドレスという、誰がどう見ても間違うはずのない、まごうことなきメイドさんだったのだ。

さらにこの美女は自らメイドと名乗ったのだから、決定的だ。

「私、本日からここにお仕えさせていただくことになりました、メイドの服部由佳里と申します」

突然自宅に現われた自他ともに認めるメイドは、呆気にとられる勝をよそにこうつづけた。

「どうぞよろしく願います、ご主人様っ」

この瞬間、勝が由佳里を家政婦として雇うことを固く誓ったのは言うまでもない。

その後、由佳里を中心として勝や美沙、それから勝の従姉妹である音々、由佳里の親友である紗耶子を巻きこんだ騒動が巻き起こるのだが、それも昨秋に由佳里が渡欧して以来、鎮火……するはずだった。

（このぶんだと、今日は美沙だけか？）

由佳里が唯一の肉親である祖母の難病治療のために日本を発って以来、勝の正妻？の座を虎視眈々と狙う音々と紗耶子は、頻繁に小坂家を訪れていた。無論、自称正妻であるところの美沙も隣家という地理的アドバンテージを利用して、ほぼ毎日、一人暮らしの勝のために食事を用意したり洗濯をしたりしにやって来ていた。

二人、もしくは三人がかち合ったとしても表面上はそう荒れないのだが、明らかに空気はピリピリしてしまふ。

美沙は比較的ストレートに感情を態度に表わすし、音々も最近のはっきりと自己主張するようになっていたため、中心にいる勝は常に板挟み状態になってストレスに苛まれる。

なにより一番の問題は、ここのとこめつきり由佳里と言動が似てきたもうひとり勘違いメイド道驀進中の紗耶子だ。